

ニュー・サウス・ウェルズ植民地 における中心集落の計画とその実施

—19世紀前半のハンター河谷を中心に—

金 田 章 裕

- 1 はじめに
- 2 植民地初期における中心集落の立地計画
 - a 1829年以前の立地計画
 - b ダーリング総督の規定
- 3 ハンター河谷における中心集落の設定
 - a ダーリング総督規定の適用
 - b 中心集落の設定と立地条件
- 4 19世紀中葉以前のハンター河谷における中心集落の展開
 - a 官設と私設の中心集落
 - b 1840・50年代の中心集落
- 5 おわりに

1 は じ め に

オーストラリアのニュー・サウス・ウェルズ植民地において、規則的な方格プランが農牧地の測量・区画に採用されたのは1822年2月のことであった。プリズベーン (T. Brisbane) 総督と測量長官オクスレイ (J. Oxley) によって実施され始めた方格プランはしかし、その後さまざまな曲折を経た。当初の1マイル方格のセクション (section) と6マイル四方を原則としたタウンシップ (township) を設定する方針は、1825年1月1日付の英本国植民地担当国務大臣バサースト (E. Bathurst) の指令によって、1マイル方格のセクション、約25平方マイルのパリッシュ (parish)、約100平方マイルのハンドレッド (hundred)、約40マイル四方の郡 (country) を設定すべく変更された。

このような政策の背景や、場所によって様々な実施状況、さらにはその改変や破綻のプロセスなどについては、すでに前著において詳説した¹⁾。しかし、このような一連の土地計画が有していた中心集落の立地計画や現実の立地の状況などについての説明は不十分であった。

そこで小稿ではまず、大小の中心集落 (town, village) の立地計画とその後の実情について検討を加えたい。その際特に、現在のニュー・サウス・ウェルズ州ニューカッスル (New-

1) 金田章裕『オーストラリア歴史地理—都市と農地の方格プラン—』, 地人書房, 1985年

castle) 西方のハンター河谷 (Hunter Valley) に注目する。その理由はハンター河谷が最初に方格プランの設定された地域であり、計画的な中心集落立地の最初の実施地域でもあったからである。²⁾ 以下に取り扱う1820年代末から1840年代にかけての政策については、すでにいくつかの研究が行なわれている。小稿の目的は、これらの先行研究の整理と諸事情の確認にあり、今後、中小集落の展開プロセスを検討する際の視角を定めるための前提となる予備作業である。

2 植民地初期における中心集落の立地計画

a 1829年以前の立地計画

1790年6月17日付に始まって、1821年2月5日付の訓令に至るまで、すなわち初代のフィリップ (A. Phillip) 総督から、6代目のブリスベン総督まで、土地計画に関する基本はほぼ同一であった。中心集落については次のような内容であった。³⁾

「貴官はまた、各タウンシップ (township) の最も便利なる地点において、貴官がそこに入植するに適當と判断される数の家族にとって便利である、宅地と牧場用区画を伴うに十分な規模を有する町 (a town) の建設に適する場所を設定されたい。この町は、船行可能な河川もしくは海岸、あるいはそこへ近接した地点に設定されるよう留意されたい。⁴⁾」

しかし、現実にタウンシップを正南北・東西方向の6マイル四方の区画とし、その内部を1マイル四方のセクションに細分することとしたのは、前述のように1822年2月18日のブリスベンの指令であり、⁵⁾ 方格プランの実施はこれ以後のことであった。この指令を受けた測量長官オクスレイは、早速測量官ダンガー (H. Danger) をハンター川流域へ派遣して方格プランの設定を開始した。⁶⁾

その結果、1823年までにはハンター川下流域一帯に一辺4～8マイルのタウンシップ23が設定された。⁷⁾ 各タウンシップが正確な6マイル四方の正方形ではなかったこと、1タウンシップ当り4区画分程度の保留地が設定されたが、必ずしも各タウンシップ中央部あるいは各タウンシップ内に限らず、必要があれば外部においても設定されたため、1カ所の例外を除けば川沿いの部分に集中していたこと、などはすでに指摘したところである。⁸⁾ この保留地は「将

2) 金田, 前掲1), 63～65, 132～138頁。

3) 金田, 前掲1), 96～97頁。

4) Phillip's Instructions re Land Grants, *Historical Records of Australia, Series I, Vol. I* pp. 124～128, など。以下、同書をH.R.A. I - I のように略記する。

5) Colonial Secretary to Surveyor General, 18 Feb. 1822, Archives Office of New South Wales (以下A.O.N.S.W. と略記) 2/1432

6) 金田, 前掲1) 132～138頁。

7) Map of the Surveyed Part of Hunter River 1823, A.O.N.S.W. Map 6280, 金田, 前掲1), 137頁

8) 前掲6)

来の中心集落 (Village) などとして最も可能性の高い場所」に設定されたものであったが、必ずしも中心集落建設予定地に特定されたものではなかった。前述のバサーストの指令によって、セクション・パリッシュ・ハンドレッド・郡の設定と共に、「町や中心集落の場所として留保されるべき保留地」の設定も定められたが⁹⁾、やがて1825年のダーリング (R. Darling) 総督への訓令において、各郡の面積および価値の7分の1にあたる土地を聖職者および学校領地とする政策も加えられた¹⁰⁾。ハンター川流域などのタウンシップをパリッシュへ変更することなどの改変を余儀なくされたオクスレイは、むしろ設定済みの保留地を聖域者達の下付地とすることを進言した。すなわちこの頃まで、英本国から中心集落を設定すべき訓令ないし指令が来ていたにもかかわらず、現実にはほとんど実施されていなかったことになる。

すでにジーンズ (D. N. Jeans) が明らかにしているように、1829年5月以前には、カンバーランド平原 (Cumberland Plain) のシドニー (Sydney) などの9市街地のほか、わずかにハンター川河口のニューカッスルが設定されていただけであった¹¹⁾。

b ダーリング総督の規定

ダーリング総督は、1828年5月7日、3人のメンバーで構成される調査委員会に、中心集落の設定・維持に関する規定案の作製を諮問した。同委員会の報告が同年6月18日に出され、これを基にして、執行委員会と測量長官によってさらに検討が加えられ、翌年3月23日に執行委員会の決定に達した¹²⁾。1829年5月27日付で政令28号として30日付官報に掲載されたその規定の内容のうち、街路や土地区画にかかわる部分は次の如くである。

1. 本植民地内の各町は、立地条件に関連して4クラスに分類されるべきである。すなわち、

第1 シドニー

第2 海洋港湾の町

第3 航行可能水域に立地している町

第4 内陸の町、である。

2. 街路は、地形上実施可能な場所においてはすべて、直線となすべきであり、交叉する

9) Surveyor-General Oxley to Governor Darling, 16 Jan. 1826. H.R.A. I - X II, pp. 406-413.

10) Earl Bathurst to Sir Thomas Brisbane, 1 Jan. 1825, H.R.A. I - X I, pp. 434-444.

11) 金田, 前掲1) 146~150頁.

12) D. N. Jeans, Town Planning in New South Wales 1829-1842, *Australian Planning Institute Journal*, October 1965.

13) D. N. Jeans, *ibid.*

調査委員会のメンバーは、W. Dumaesq W. Cordeaux, J. Busby の3人。測量長官は、1828年5月の J. Oxley の没後、T. L. Mitchell となっていた。

14) *Sydney Gazette*, 30 May 1829.

街路は、メインストリートに対して直交するように設定されるべきである。

3. 幅員は、メインストリートの道路敷として、80フィートの馬車道と両側の各10フィートの歩道からなる100フィートとすべきであり、これに交叉する街路又は下級の街路は66フィートの馬車道と両側各9フィートの歩道からなる84フィート幅とすべきである。これらの幅員内には、いかなる種類の階段や張り出しも認められない。

4. すべての人々は、建物を建てる際に、いずれの街路においても、歩道から正確に14フィート離すことを要請される。このようにして残されたオープン・スペースは、もっぱらオープン・ベランダないし望ましい植栽に充当されるべきである。従って、相対する建物の距離は、メインストリートで128フィート、これと交叉する道路ないしは下級の街路で112フィートとなる。

5. 境界線の連続性を保つという見地から、上述の建物の前の14フィートのスペースは、解放的な柵で囲まれることが望ましい。もしくは、商店などでは、10フィート間隔の杭によって、出入口を設定するのが望ましい。

(6～9, 略)

10. 各土地地区画は、地形とほかの個々の状況が許す限り、半エーカーの面積からなるものとする。メインストリートにおいては間口1チェーン、奥行5チェーンとし、これと交叉する街路または下級の街路では間口2チェーン、奥行2.5チェーンとする。メインストリートの間隔は従って、10チェーンとなる。

(11・12, 略)

以上のような直交する広い街路からなるダーリング総督の規定が、彼自身と調査委員長ダマレクス (W. Dumaresq) による、インドのヨーロッパ人居住区における経験に立脚したものであり、測量長官ミッチェル (T. L. Mitchell) のスペインでの体験から主張した考えを押えて採用されたものであったことは、すでにジーンズによって明らかにされている¹⁵⁾。従って、この規定を基礎としたニュー・サウス・ウェルズ植民地に多い都市計画の類型を、西オーストラリアの「ロウ型」、南オーストラリアの「ライト型」などと共に、「ダーリング型」とでも呼ぶべきことをすでに述べた¹⁶⁾。ダーリング総督の規定が最初に適用されたマイトランド (Maitland) の例や、この規定の影響の下に設定されたメルボルン (Melbourne) などについては、すでに紹介したが¹⁷⁾、以下においては、さらに立ち入った検討を加えておきたい。

15) D. N. Jeans, *ibid.*, 12). なお、拙著 (前掲1) 89頁の注102) に「狭い」となっているのは「広い」の誤りである。

16) 金田, 前掲1), 81頁。

17) 金田, 前掲1), 56～66頁。

3 ハンター河谷における中心集落の設定

a ダーリング総督規定の適用

前掲のような都市計画の規定にかゝった測量長官ミッチェルは、規定公布の年に自らマイトランドの設計を統括した。ハンター川のウォリス川(Wallis Creek)との合流点下流側の台地上に、都市機能の中心として3ヵ所の広場・市場を設定し、低い屋根上を縦走するハイ通り(High Street)を軸として、幅の広い直交状街路からなるものであった。個々の宅地区画もまた、1×5チェーンないし2×2.5チェーンであり、規定に準拠したものであった。しかし、すでに指摘したように、規定にみられるようなメインストリートとこれに直交する街路との幅員の違いが設定されておらず、メインストリートの間隔もまた、規定にみられるような10チェーンに設定されているとは限らない。街路によって区画されたブロックは幅が5・7.5・10チェーンの3種、長さが5・10・16・20チェーンの4種あって様々な方形をなしていた。¹⁸⁾ このマイトランドの設計についての報告の中で、ミッチェルは、各ブロック(セクション)に番号を付し、ブロック内の宅地区画にもブロックごとに通し番号を付すことを提案し、それを実施した。¹⁹⁾

マイトランドを皮切りとして、1830年代に入ると、マサル・ブルック(Muscle Brook)、バターソン(Paterson)、ウォロンビ(Wollombi)、レイモンド・テラス(Raymond Terrace)、バリンガラ(Ballyngarra)、スコーン(Scone)、アバディーン(Aberdeen)、クラレンス・タウン(Clarence Town)、ダンゴッグ(Dungog)、シーハム(Seaham)などが、ハンター河谷に政府によって設計・公示された(第1図参照)²⁰⁾。40年代に入ってもこの傾向は続くが、30年代に比べると、その数は減少しており、ハンター河谷での政府による中心集落の設定の

18) 金田, 前掲1), 第2-18図参照。

19) T. L. Mitchell, Report on the Township of Maitland, 23 May 1829, A.O.N.S.W. 4/2519, 9.
この報告は、ダーリング総督規定の公示以前であるが、3月23日の同規定の執行委員会決定の後であり、実質的には発効していたとみてよい。

20) Townships 1829-40, A.O.N.S.W. 4/2519, 計16の都市計画にかかわる文書・地図が集められている(一部欠落あり)が、これによれば、次の日付で4市街の計画の確定が最終的に測量長官から総督府長官房長に報告された。

Muscle Brook 11 Nov. 1833

Wollombi 6 Nov. 1833

Raymond Terrace 27 Nov. 1837

Clarence Town 2 June 1832

21) *New South Wales Government Gazette*.

Paterson 11 Nov. 1833

Ballyngarra 5 Sep. 1837

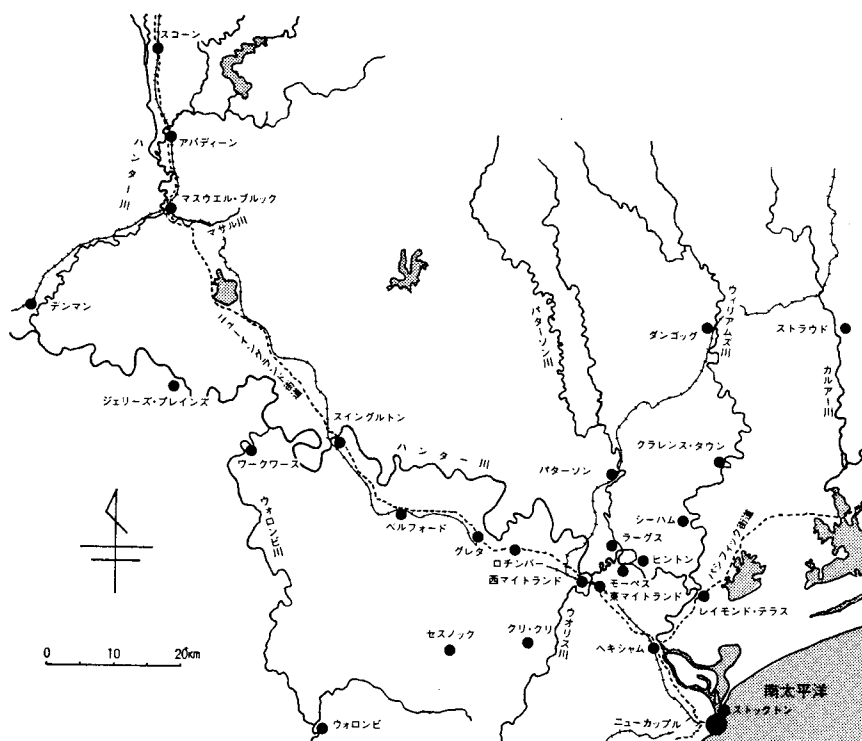
Scone 5 Sep. 1837

Aberdeen 9 Oct. 1838

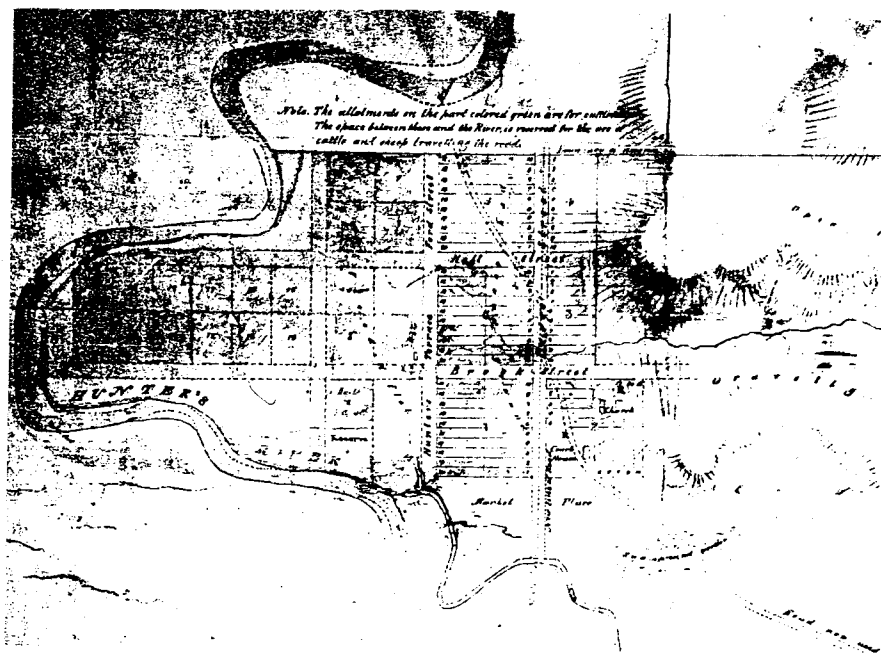
Dungog 1 Aug. 1838

Seaham 1 Aug. 1838

22) *New South Wales Government Gazette*に公示される。1840年代では、Camberwell (1840年), Jerry's Plains (1840年), Alnwick (1849年), Greta (1843年)などが公示された。



第1図 ハンター河谷主要部の概要



第2図 1833年、マサル・ブルック (Muswellbrook) の計画図

最盛期は30年代であったことが知られる。

第2図はハンター川上流のマサル川 (Muscle Brook) との合流点付近に設定されたマサル・ブルック (現在のマスウェルブルック, Muswellbrook) の1833年の計画図である。²³⁾ ハンター川東岸の当時使用されていた道路を、ほぼ南北方向の直線に修正してメインストリートとし、これを軸として直交する街路で区画された1辺10チェーンの正方形のブロックを設定したものである。メインストリートに沿った6つのブロック (東側の列は丘陵にさしかゝるため西半部のみ) には1×5チェーンの宅地区画が設定され、東南隅のブロックには教会と裁判所の用地が設定されている。この6ブロックの南側は市場用の広場、西側は家畜を移動する際の一時的な放牧用の保留地である。²⁴⁾ 極めて小さな町の計画であるが、前述のマイトランドよりは忠実にダーリング総督の規定に準拠した計画であるといえよう。しかし、この場合も、ブロックを画する道路の幅員に広狭の差はない。

1843年頃に刊行されたベイカー地図帳には、マイトランドやマサル・ブルックをはじめ、ハンター河谷の8つの中心集落の略図が割図として掲載されている。²⁵⁾ その概要は第3図の如くであるが、街路パターンとそれに画されたブロックの形状からすれば、2つのグループに大別することができる。1つは、クラレンス・タウン、ダンゴッグ、ジェリーズ・プレインズ (Jerry's Plains) など、前述のマサル・ブルックと同様に基本的に正方形ブロックからなるものである。他は、パターンソン、ウォロンビなど、前述のマイトランドと同時に正方形ブロックのほか長方形のものを混じえたやゝ不規則なパターンである。レイモンド・テラスの場合も基本的にこのグループに入れられるが、斜行する街路や広場内に曲線の街路も採用されている。

これらの個々の町の設計は、多くの場合、不在がちのミッチェルに代わって、長官代理のペリー (S. A. Perry) など彼の部下によって行なわれたことはすでに前著で述べた。ミッチェルは都市計画のみならず方格プランの実施そのものに消極的ないし批判的であったし、彼の大きな関心はずっと地形調査・測量にあった。²⁶⁾ ミッチェルが設定した東マイトランド (East Maitland) が、後述するように、西に発達した西マイトランド (West Maitland) に発達の上で遅れをとったことも、彼が中心集落の立地計画に熱心でなくなった理由であると、²⁷⁾ ジーンズは見ている。

いずれにしても、ダーリング総督の規定の制定後、最初に設定されたマイトランドが、規定

23) Muscle Brook Village Township 1833, A.O.N.S.W. Map No.6278.

24) Surveyor General to Colonial Secretary, 11 October 1833, A.O.N.S.W. 4/2519. 93.

25) W. Baker, *Baker's Australian Atlas*, Sydney, 1843~6.

ハンター河谷にかかわるのは、Country of Northumberland, County of Gloucester, County of Durham, County of Hunter の4葉。

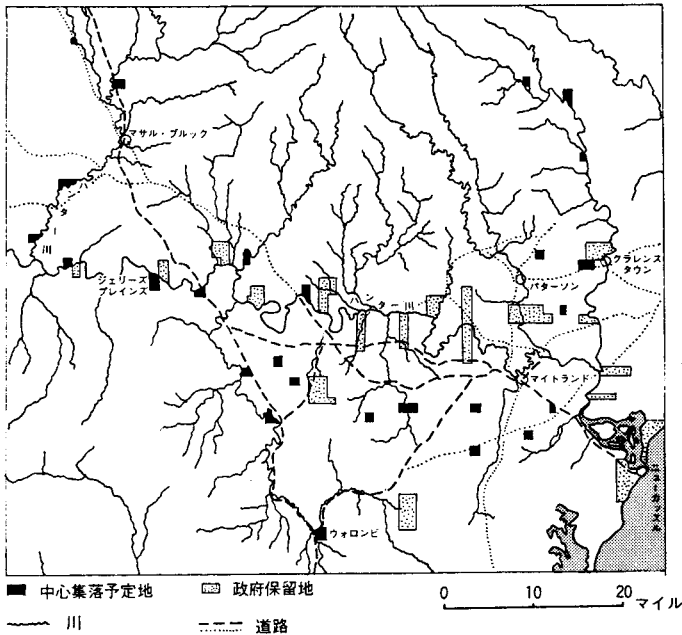
26) 金田、前掲1) 63~65, 163~175頁。

27) D. N. Jeans, *Official Town-Founding Procedures in New South Wales. 1828-1842. Journal of the Royal Australian Historical Society*, Vol. 67, No. 3, 1981

を厳密に適用したものでなかったために、それ以後の計画にさまざまなパターンを生むこととなった。

b 中心集落の設定と立地条件

1825年のバサーストの指令以来、ハンター河谷のタウンシップはパリッシュに再編され、またその設定範囲も拡大したが、同指令に掲示された「町や中心集落の場所として留保されるべき保留地」の設定も同時に進行した。1837年のディクソン(R. Dixon)作製図には、この



第4図 1837年ごろのハンター河谷における中心集落予定地(ディクソン作製図による)

ようにして設定された数多くの中心集落予定地が描かれており、ハンター河谷だけでも第4図のように多数にのぼる。これらは、1825年以前にタウンシップが設定されたハンター川下流域両岸を除けば、基本的に約25平方マイルの各パリッシュ毎に設定されたものである。タウンシップ設定域においては、本来1タウンシップ当たり4つのセクション分に相当する政府保留地が確保されており、特に中心集落予定地としなくても、必要があれば転換し得る条件にあったとみられる。²⁸⁾

しかし、このような多くの中心集落予定地のすべてに、実際に町が設定されたわけではない。ジーンズによれば、一般に次のような手続きを経て、前項で述べたような町が設定された。²⁹⁾

28) 金田, 前掲1) 137・138, 147~149頁.

29) D. N. Jeans, *ibid.*, 27)

ある地区における保留地のどれに中心集落を設定するかという選択がまず必要であり、これには測量庁の意図よりもむしろ現地の意向が大きな影響力を有した。たゞし、この過程において、どこが「最も中心的な」場所であるかという議論には、しばしば測量庁の職員が加わった。

場所が選定されると、地区測量官によって、町が計画される場所の地形図が作成された。通常これをもとにして、シドニーの事務所において、測量長官または長官代理によって街路や宅地区画などが設計された。³⁰⁾

このようにして作製された町の計画図は、時に説明の手紙を添えて総督に送付された。各計画は執行委員会で検討された後、総督が署名して承認し、測量長官に実際に現地に道路・区画を設定するよう指示した。

すべての町の設定が必ずしもこのようなプロセスを経て策定されたとは限らない。しかし、1831年になると新しい土地規定によって、土地の競売システムと同時に、測量・区画が完了した場所の区画図の公開と官報による公示が定められたから、町の設定が承認された際には、遂一官報に掲載された。³¹⁾ 公示の際には、同じく町を意味する用語ではあるが、場所によってタウンシップ、町 (town)、ヴィレッジ (village) の3種類が使用された。前述の例では、マイトランド、マサル・ブルック、パターソン、ウォロンビ、バリンガラ、スコーン、アバディーンなどがタウンシップ、レイモンド・テラス、ダンゴッグ、シーハムがヴィレッジと表現されていた。クラレンス・タウンは地名そのものも町であるが、マイトランド、シーハム、パターソン、マサル・ブルック³²⁾なども町と表現されている場合があり、これらが必ずしも明確に定義・区別されて使用されているわけではない。ただし、この段階では、タウンシップは「町立て地」とでもいうほどの意味であり、前述のような1825年以前の意味とは全く異なった内容を有していることに留意しておきたい。³⁴⁾ ジーンズによれば、測量庁の文書にはタウンシップの使用例が少なく、また町と呼ばれる場合には、ある地域の最初の都市的集落であったり、管区警察署の所在地であったりする場合が多いとされる。³⁵⁾ この傾向は認められるにしても例外が多いが、³⁶⁾ 典型的には町が相対的に大きい都市的集落、ヴィレッジが小さな町を意味することは事実である。

さて、前述のような東マイトランドの位置を選定した理由として、ミッチェルは次のよう

30) Jeans はこのような設計方法が、計画の画一性を保持した最大の理由であったと同時に、現地に十分に適合していない計画が時折り生じた理由でもあったとしている。

31) 前掲21) のように "Notice" (後には "Proclamation") として掲載された。

32) *New South Wales Government Gazette*. 24 Dec. 1839.

33) *Sureyor General to Colonial Secretary*, 11 Nov. 1833, A.O.N.S.W. 4/2519. 93.

34) 金田, 前掲1) 96・97頁。

35) D. N. Jeans, *Territorial Divisions and The Locations of Towns in New South Wales, 1826-1842*, *The Australian Geographer*, 10. 1967.

36) 例えば前掲19) は測量庁の文書であるがタウンシップの語を使用し、前述のシーハムの場合は町ともヴィレッジとも表現されている。

な条件をあげている。³⁷⁾

ハンター川の最初の渡河可能な浅瀬は、ウォリス平原 (Wallis Plains) であり、陸路でニューカッスルから約20マイルである。ここまで航行可能と考えられるかも知れないが、通常はずっと下流のクロウズ (E. C. Close) の下付地付近に船が係留されている。この間の河道が屈曲しているために、ウォリス平原の渡河地点まで陸路でわずか5マイルに過ぎないのに、川を溯上すると14マイルもあるからである。従って、ウォリス平原の位置は、ハンター川とその下流の支流流域やその北方におけるオーストラリア農業会社 (Australian Agricultural Company) の下付地などとの連絡上最も便利なルート上にあたり、ニューカッスル港とハンター川流域の肥沃な地域との、水運による最も近接した地点でもある (第4図参照)。

すなわち、ハンター川の実質的な溯航点に近い、水陸交通の結節点であることを最大の理由としていることになる。さらに、ウォリス平原内で、東マイトランドの位置を選定した理由として、30~40の家がすでに付近一帯に存在していたが、運よく最も適当な部分が空いていたこと、そこが同時に雨季の水害からも安全なこと、を指摘している。

以上のように、中心集落の立地点の選定理由として水陸の交通条件と水害から安全な微地形条件が強く意識されていたことが知られ、他の町の場合においても同様であったことを確認することができる。例えば、マサル・ブルックの場合、第2図のように、ハンター川が大きく蛇行した地点の河岸段丘上に位置し、町の設定時の少し前にできていた現在のニュー・イングランド街道 (New England Highway) に相当する幹線道路 (New North Road) 沿いの保留地に設定されたもので、将来、対岸の道路と結合してさらに便利な地点となることが期待できる位置であった。³⁸⁾

第4図からも知られるように、中心集落予定地そのものが、川沿いあるいは幹線交通路沿いに設定されており、第1図のように実際に設定された場所もまた当然、その条件を踏襲していたことになる。

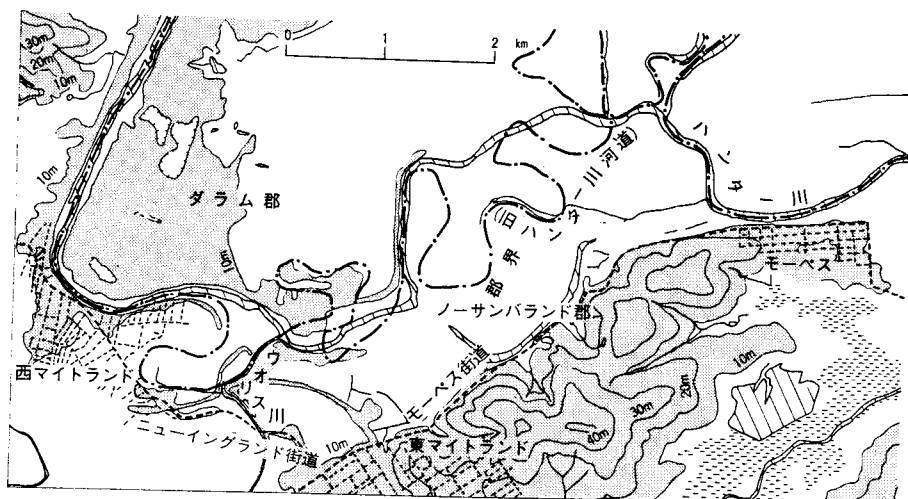
4 19世紀中葉以前のハンター河谷における中心集落の展開

a 官設と私設の中心集落

1824年以後、ウォリス平原とニューカッスル間の定期舟便が開始されると、西マイトランド (West Maitland) とモーペス (Morpeth) に私企業による港と商業施設が経営され、中心集落へと発展する気配を見せていた。西マイトランドは、前述のミッチェルの報告書にあるハンター川の最初の渡河地点、モーペスは同様にクロウズの下付地に成立した河港であっ

37) Report on the Township of Maitland, *ibid.*, 19) 後述のように、マイトランドの選定・測量等に当たった測量官は G. B. White であった。

38) *ibid.*, 19)。



第5図 マイトランド付近の地形

た。このウォリス平原に、1829年、前述のような理由でミッチェルが選定したのが東マイトランドであった。第5図のように西マイトランドはハンター川南西岸の標高10m前後の低地、モーベスはその下流南岸の標高10～20m程度の小さな台地上であり、東マイトランドの方はちょうど両者の中間に位置する標高10～30m程度のなだらかな丘陵上である。

西マイトランドとモーベスに加えて、東マイトランドが設定された経緯は、キング (H. W. King)³⁹⁾ によれば次の如くであった。

西マイトランドは低地にあるために水害を受けることと、この付近に官設の町が存在しなかったために、入植者達はもっと良い位置の中心集落の建設を請願した。選ばれた場所はクロウズの下付地であり、そこに官設の町を建設するための長い補償交渉を経て、漸く東マイトランドの設定にこぎつけ、測量官ホワイト(G. B. White)が派遣されて測量・設計を始めた。その結果前述のような1829年の都市計画ができ上がり、1833年には正式に町立てが公示された。ミッチェルが説明したような最適の交通条件と微地形条件を基礎として、大いに発展すべき町であった。

1830年代に、ブルトン (R. N. Breton)⁴⁰⁾ はマイトランドを次のように説明している。

マイトランドは、「今やハンター地域における第1の町であり、急速に大きくなっている。しかしながら、政府が責められるべきではないが、その位置はとりわけまずい選定である。というのは、タウンシップと呼ばれている裁判所や刑務所があるところは、一方の町から若干離れて洪水のとどかないところにある。しかし、舟に荷を積み下ろしできる施設があるために、土地所有者達はハンター川の堤防上に家を建てているし、その支流の堤防上も同様で

39) H. W. King, *The Urban Pattern of The Hunter Valley, A Study of Town Evolution, Morphology and Aspect*. The Hunter Valley Research Foundation, Monograph No.17, Newcastle, 1963. pp.46～65.

40) R. N. Breton, *Excursions in New South Wales, Western Australia and Van Diemen's Land*, 1830—1833, London, 1834, p.106

ある。その結果、恐らく最初の異常増水時に家のいくつかを破壊し、住人を溺れさせることになる可能性が高い。すでに一度ならず水が街路にあふれ出ているのである。」

しかし、1841年に至っても東マイトランドは漸く1,022人の人口を擁すにとどまっていたのに対し、洪水の危険があり、しかも不規則な街路パターンであった西マイトランドの方は、これを上まわって1,746人に達していた。

東マイトランドが遅れをとった理由について、キングは次の3点を指摘している。⁴¹⁾

- ① 十分な真水の供給が手近に得られなかった。
- ② 西マイトランドおよびモーペスと異なって、生活と経済活動の動脈であるハンター川の河岸に接していなかった。
- ③ 西マイトランドに比べて官設の町の土地の値段が高かった。

しかも、この傾向は1840年代に入っても変わらず、東・西マイトランドの差はむしろ拡大するばかりであった。1851年には東マイトランドの人口が1,099人と停滞しているのに対し、西マイトランドはその約3倍の3,131人に達し、モーペスも734人を有していた。⁴²⁾

西マイトランドやモーペスのような町、すなわち政府によって計画・設定されたのではなく、自然発生的に成立・発展したり、土地所有者が個人的に所有地を細分して宅地として販売してできた、いわば私設の中心集落の存在も特に例外的なものではなかった。中には東・西マイトランドのように官設と私設の町が隣接して存在したものもあり、官設の町の方が繁栄した例もあれば、私設の町の方がまさった例もあったことが知られている。⁴³⁾

b 1840・50年代の中心集落

1840年代のハンター河谷では、キャンパーウェル (Camberwell)、ジェリーズ・プレインズ (Jerry's Plains)、グレタ (Greta)、アニック (Alnwick) などの中心集落が設定されたが、⁴⁴⁾前述のように30年代に比べるとその数は少なく、しかも、前3者が1840年のことであった。中心集落の基本的な配置は30年代におおよそ完了し、次の大きな変化は1880年代の石炭採掘開始に伴う変革期⁴⁵⁾まで待たねばならない。

41) H. W. King, *ibid.*, 39)

42) *Census of New South Wales*, 1851

この段階では、Sydney が53,924人、Newcastle が1,340であったから、East Maitland の停滞以上に West Maitland が発展したことに注目を要することになる。

43) H. W. King, County, Shire and Town in New South Wales, *The Australian Geographer* 6-3, 1954.

44) *New South Wales Government Gazette*.

Camberwell 12 Nov. 1840.

Jerry's Plains 6 June, 1840.

Greta 19 Oct. 1843.

Alnwick 11 Sep. 1849.

45) H. W. King, *ibid.*, 39) pp.20~22.

しかし1842年には、中心集落の都市プランにかかわる基本は、土地政策の面から大きく転換した。1842年6月に英本国で成立したオーストラリアの王領地販売法は、1エーカー当り1ポンドという最低競売価格を設定したものであり、その後大きな影響を及ぼしたものであった。⁴⁶⁾ 同法は土地区画を「市街地区画・郊外区画・地方区画」の3種に区分した。⁴⁷⁾ 市街地区画とは既存の町および「総督によって町の用地として選定されるすべての地区」内の土地であり、郊外区画はそこから5マイル以内の土地、地方区画はこの両者以外のすべての土地と規定された。

これにもとづいて、翌年3月1日付のシドニーで公示された土地規定は次のように定めていた。⁴⁸⁾

「市街地区画は、現在の町の範囲内のすべての土地を含み、これまで市街地地筆と呼ばれてきたものと異なるものではないものとする。」

「郊外区画は上記の町の5マイル以内にあるすべての土地を含むものとする。5マイルは、南北・東西のセクションの区画線によって定められ、町の外郭線から各方向に5マイル未満ではないものとする。しかしながら、上記のいかなる町に近接していても、いかなる価値の増大をも導き出し得ないと総督が判断した場合には、上述の法律の条項の下に、総督はここに述べたいかなる土地をも郊外区画のクラスから除外することができるものとする。」

「地方区画はすべての他の土地を含むものとする。」

さらに、各クラスの土地区画の面積についても、「放牧地」を「640エーカーを越えないセクション」として、「耕作に適した土地または小農園として購入したい土地」を20～320エーカーの「特別地方区画」として扱うことを定めている。市街地区画の面積についても、「中小の町の宅地は、一般に半エーカーの地筆として販売されるものとする。しかしながら、大きな町や広い地域の中心都市となりそうな場所においては、宅地の地筆は4分の1エーカーを越えないものとする」としている。郊外区画については、「2～640エーカーのさまざまな区画として設定・販売するもの」としている。

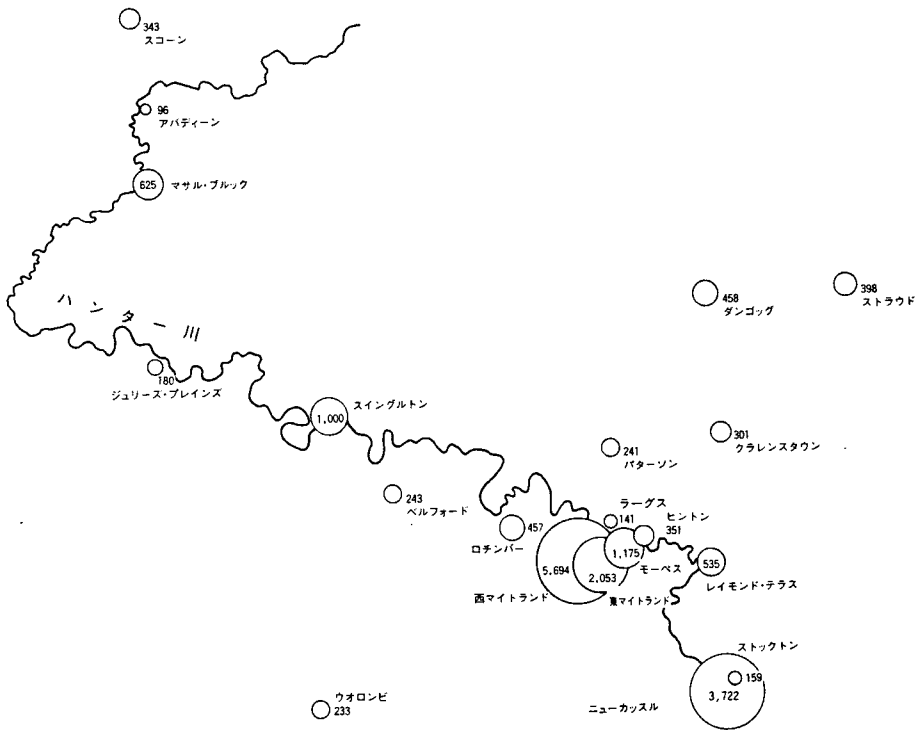
すなわち、農牧地については、1マイル方格のセクションの面積である640エーカーを基本としながらも、耕作地ないし郊外区画としてそれより小規模なものを認め、市街地区画についても、半エーカーと4分の1エーカーの2種類を設定していることになる。

従って、この新しい土地規定によれば、4分の1ないし2分の1エーカーの区画からなる市街地が、その外側をとり囲む2～640エーカーの中間的な面積の区画群を伴って、外側に広

46) An Act for regulating the Sale of Waste Land belonging to the Crown in the Australian Colonies. 5&6 Vict. C. 36. (22nd June 1842)

47) Town Lots, Suburban Lots, Country Lots.

48) Land Regulations, 1st, March, 1843. *New South Wales Government Gazette*.



第6図 1861年におけるハンター河谷の中心集落人口

がる640エーカーの1マイル方格のセクションの中に位置する、といった都市計画が出現する可能性があることになる。しかし、1840年代のハンター河谷ではその典型的な事例を確認することができない。

とはいっても、むしろハンター河谷における官設・私設の中心集落が全く変化しなかったわけではない。開拓の進展および農業技術ならびに輸送技術・手段の発展により、中心集落の人口もまたほとんどの場合、増大を続けた。第6図は1861年のハンター河谷における大小の中心集落の人口規模を示したものである。⁴⁹⁾ 西マイトランドが5,694人と依然として最大人口を有し、東マイトランドの2,053人の約2.5倍に達している。ニューカッスルの人口増加もスピードアップしているが、それでもまだ3,722人で東・西マイトランドの半分以下である。上流域ではマサル・ブルックが625人で最大であった。

5 お わ り に

ニュー・サウス・ウェルズ植民地発足以来、総督は町の設定をすべき訓令を得ていた。1822

49) *Census of New South Wales, 1861.*

年からは1マイル方格のセクションと6マイル四方を原則としたタウンシップの設定が開始され、1825年からはタウンシップが約25平方マイルのパリッシュに変更された。パリッシュ設定の指示・訓令は同時に各パリッシュにおける中心集落予定地の設定をも指示していた。

しかし、中心集落ないし市街地は、1829年5月まで、シドニー周辺のカンバーランド平原以外では、ニューカッスルしか存在していなかった。

ところが、1829年にはダーリング総督の下で、中心集落に関する方格状の街路パターン、街路の幅員と間隔、半エーカーの市街地区画の形状などの規定が定められ、同年にハンター河谷の東マイトランドが設定された。これはしかし、ダーリング総督の規定を厳密に適用したものでなかったために、後に続く都市計画にかなりの融通性をもたせることとなった。1830年代に数多く設定されたハンター河谷の計画には、これに比較的良好な準拠したものも、そうでないものもあった。

一般にこのような中心集落を設定する場合、地元の要請などをもとにしてまず場所が設定され、地形測量のあとシドニーの測量庁で計画が決定され・公示された。この頃には、タウンシップの語は、1820年代前半までと異なって、「町立て地」とでもいうほどの意味で、町やヴィレッジなどと大差のない意味で使用されるようになっていた。

中心集落の立地点が選定される際には、水陸の交通条件、市街地としての地形条件などが重要視されたが、このような官設の中心集落のほか自然発生的ないし私設の町も成立した。例えば、自然発生的な西マイトランドの方が、地形条件が悪いにもかかわらず、ハンター川の水運を直接利用できることから、官設の東マイトランドよりはるかによく発展した。

ハンター河谷では1830年代に、中心集落の基本的な配置がほぼ完了したが、中心集落の計画にとっては1842年の王領地販売法が、極めて重要であった。同法は土地区画を、市街地区画・郊外区画・地方区画の3種に区分し、これに基づいて1843年の土地規定では、4分の1と2分の1エーカーの市街地区画、2～640エーカーの郊外区画などを定めた。

以上のような官設の中心集落の立地は、本来パリッシュごとに設定された中心集落予定地にかかわるものであった。また、1829年の規定を大きく変えることとなった1842年の王領地販売法においても、農牧地の基本単位が1マイル方格のセクションに相当する640エーカーであることなど、中心集落の立地は農牧地の方格プランと密接に関連するものであった。

小稿では、農牧地の方格プランの最初の施行地であり、中心集落に関する1829年のダーリング総督規定の最初の適用地でもあったハンター河谷を軸に概観し、上述のような流れを確認することができた。従って次には、最も典型的な方格プランの実施地域におけるさらに詳細な検討が必要となる。そのためのフィールドとしてはポート・フィリップ地区(Port Phillip District、後のビクトリア植民地)が最適であるが、それには稿を改めねばならない。

〔付記〕 小稿は昭和61年度科学研究費補助金一般研究C(課題番号61580208、研究代表者金田章裕)の成果の一部である。

TOWN PLANNING IN THE HUNTER VALLEY, NEW SOUTH WALES IN THE FORMER HALF OF THE NINETEENTH CENTURY

by

Akihiro Kinda

Governors of New South Wales were instructed to plan a town in each township which was laid out as 6 miles square after February 1822. Before long 6 miles square township was directed to change into about 25 square miles parish and at the same time a village reserve was also directed to laid out in each parish in 1825 by the new colonial policy from London.

Before May 1829, sole Newcastle was established outside of Cumberland Plain, but many village reserves were reserved by 1937 such as shown in Figure 4.

On 30th May, 1829, Governor Darling published the new regulation for the laying out and maintenance of town plans as follows: "Each Allotment will consist, as nearly as the nature of the ground and other accidental circumstances will permit, of Half an Acre of Land. Those on the Main Streets will have a Frontage of One Chain and a Depth of Five Chains; those in the cross or inferior streets a Front of Two and a Half Chains and A Depth of Two Chains. The distance, therefore, between the Main Streets will be Ten Chains." East Maitland was laid out in the same years by the Surveyor-General T. L. Mitchell, but it was not completely faithful to the regulation. It seems the main reason why there were some variations of town plans in Hunter Valley such as shown in Figures 2 and 3.

D. N. Jeans already explained official town-founding procedures 1828–1842. For these procedures the requests of local people were very important to determine the location of the town. The distance from the navigative river and the existence of the main road were also important factors for the location of the township as well as the physical feature. By this time the word township became to mean townsite or town or village, quite different from its former meaning before 1825.

Some private towns were developing such as West Maitland and Morpeth in the Hunter Valley besides government townships. West Maitland became the largest center

in the valley in spite of her bad physical conditions, but East Maitland was always behind the West, because of the distance from Hunter River, expensive cost of town allotment and the shortage of fresh water in the township (See Figure 5) . Almost all government townships were established in 1830's in the Hunter Valley. Their populations in 1861 were shown in figure 6 .

For town planning in and after 1840's, new "Act for regulating the Sale of Waste Land belonging to the Crown in the Australian Colonies" was very important. The Land Regulation based on this Act was published in 1843. It divided the land into three classes; town lots of a quarter or half acre, suburban lots of 2 – 640 acres and cuntry lots. The shapes of these lots and towns were closely connected to rectangular land survey based on one mile square section.